

アイヌ民族の編袋

—地域差と年代差、及び「土産物」・「伝統工芸品」としての継承—

大坂 拓

目次 はじめに

- 1 先行研究の到達点と課題
 - 2 対象資料の選定
 - 3 分類
 - 4 分類群間の地域差・年代差
 - 5 II類の「土産物」・「伝統工芸品」化
- おわりに

Key Words アイヌ民族 (Ainu)、クリルアイヌ (Kuril Ainu)、編袋 (Basket)、製作技術 (Production techniques)

はじめに

本稿では、アイヌ民族の編袋を分析対象として、製作技術に着目した分類を提示したうえで地域差を具体的に明らかにするとともに、収集年代毎の分類群の分布と組成比の比較から、戦後に特定のタイプの編袋が増加しており、その背景に、当時盛んになっていた北海道観光と連動し、平取町二風谷及び周辺地域で「土産物」として編袋の大量生産がなされ流通するようになっていたことを指摘する。

ここで編袋と呼称するのは、アイヌ民族が使用した各種の袋状製品のうちアイヌ語北海道方言でsaranip (田村 1996: 609) などと呼ばれる⁽¹⁾、植物質の素材で編まれ、屋外での収穫物の運搬や屋内での保存用食料の収納など様々な用途に使用されてきたものを指す。現在では日常生活の中で用いられることは稀になっているものの、伝統工芸品として盛んに製作されており、製作技術の詳細なマニュアルも刊行されているほか (財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構 2004)、文化伝承や普及啓発を目的とした製作講習会も各地で開催されている。

このような状況のなかで筆者が新たに製作技術に着目した分類を行うことについては、既存の記述に屋上屋を架すものとする向きがあるかもしれない。しかし、実際のところ、これまでの各種の記録は日高西部沙流川流域にほぼ限定されており、地域差を視野に入れた分析は行われていない点に限界がある。何よりもまず、広範囲を

網羅した検討によって基礎的な地域差の枠組みを確認しておく必要がある。

近年、文化伝承の場ではアイヌ民族の「伝統文化」にも地域差が存在したことが強く意識されるようになってきているものの、従来の物質文化研究では儀礼具や衣服などに関する一部の優れた成果を除けば、「伝統文化」の地域差の実態がいかなるものであったのか具体的に提示するに足る情報の蓄積はなされておらず、基礎的な記述的研究は緊急性が高い課題となっている。

通時的に見た場合、物質文化の変遷はアイヌ民族の辿った近現代史と不可分の関係にあり、「伝統文化」に関する両極端の語り—「脈々と受け継がれてきた」ないしその対極にある「変化して失われてしまった」—を乗り越えた歴史的変遷を明らかにするためには、どの地域でいつ、何がどのように変化し、何が変わらずに伝承されてきたのかを、その背景を視野に入れつつ一つずつ具体的に明らかにしていかなければならない。

結論の一部を先に述べれば、編袋は1870～1940年代にはサハリンを除く広い地域で使用され、口縁部処理の方法等に顕著な地域差が認められたが、1950年代以降は複数の地域で製作が断絶して技術系統の単純化が起こる一方、旭川市や平取町、浦河町などでは土産物として製作され続け、特に平取町では複数の製作技術の中から「編台」を用いる製作技術を梃子に大量生産されるようになり、そこでの製品が北海道全域に渡り広域に流通していた。つまり、北海道観光と結びついた「土産物」製

大坂 拓：北海道博物館アイヌ民族文化研究センター アイヌ文化研究グループ

(1) 日本語名称は所蔵機関によって様々な名称で登録されているが、本稿では煩雑を避けるため全て編袋と統一して表記することとした。アイヌ語名称については、分析対象とした資料の中にもkaropなど、saranip以外の名称が付属したものも少なくないが、ここでは深く立ち入らない。

作販売の中で「脈々と受け継がれてきた」「伝統文化」もまた、特定地域の特定の技術への収斂という変化を経験していたことを、資料を通じて跡付けることが可能である。

以下では、第一に先行研究の到達点と課題をまとめ、第二に、本稿の対象資料の性格について述べたのち、第三に分類を提示し、第四に各分類群の地域差と年代学的変遷について論じ、第五に大量生産と広域流通がなされた一群について詳述した後、最後にまとめをおこなう。

1 先行研究の到達点と課題

(1) 杉山壽榮男の研究

杉山は「アイヌの編物」(杉山 1940)のなかで、編袋に「手によつて編み出され」たものと「筵様の物を編むと同じ」編台にかけて編むものがあり、「大なる口径のもの」の多くが編台を使用して編まれることを指摘した(杉山 1940: 67-68)。後年、『日本原始繊維工芸史土俗編』(杉山 1942)において編台を用いた編袋製作過程を示す写真を提示している(図3: 1)⁽²⁾。

(2) 林 善茂の研究

林は「アイヌの収穫・貯蔵技術」(林 1959)のなかで、編袋の素材や野草・穀物の収穫時の使用方法を記述している。これらの記述がどの地域で得られた情報かを林は特に記載にしていないが、注で複数の平取町内の伝承者の氏名を情報提供者として挙げられていることから、多くは沙流川流域での調査に基づいたものと判断できる。

素材についてはシナノキの樹皮を使用するものが最も一般的ながら、オヒョウニレやブドウヅルなど多様な素材のものが存在するとしている。穀物の収穫にあたっては右手で摘み取った穂を左肩にかけた編袋に入れ、作業が進んで編袋がいっぱいになると大型の「ポロサラニップ」に移しかえながら作業を継続したとする(林 1959: 11)。また、収穫した穀物を乾燥させたのちに倉で貯蔵する際には、「トッタ」と呼ばれるさらに大型の編袋に移し替えるという(林 1959: 26)。

それぞれの大きさには明確な境界があるわけではないとしつつ、手で持つものはおおむね「八升ないし一升位」、「ポロサラニップ」は「五斗乃至六斗」、トッタは「一石二斗乃至一石五斗」に達することも記述している。

その他、手で持つものには生の樹皮で編んだ「イサロイキップ」と呼ぶものがあり、それが「ラシサラニッ

プ」の一種であるとする情報も記した(林 1959: 12)。

(3) 河野広道の研究

河野は『アイヌの生活』のなかで、目的に応じたいくつかのタイプがあることを簡潔に指摘するとともに、新ひだか町東静内での編みの作業姿勢を写真を用いて紹介している(河野 1956: 25)。提示された写真に写る編袋は口縁部まで完成していることから、実際の製作工程を撮影したものではなく、完成品を用いて姿勢のみを再現したものと見られるが、日高地方東部における製作工程の記録そのものが少ないなか、作業姿勢を覗うことができるものとして貴重である。

(4) 萱野 茂の研究

萱野は、沙流川流域のアイヌ民具を網羅的に記述した大著『アイヌの民具』において編袋についても多数の写真と図を交えて詳細な記述をおこない、製作技術と容量による分類を提示している(萱野 1978: 128)。その内容をまとめると、下記ようになる。

表1 萱野が示した製作技術による分類

	名称	製作技術／素材
1	saranip	iteseni (編台) を使用する／細く裂いたシナの繊維
2	ceoske saranip	吊り下げて底の方かららせん状に編む／シナの繊維を撚ったもの
3	ras saranip	垂直に立てて編む／シナの内皮を裂いたもの

表2 萱野が示したsaranipの容量による分類

	名称	容量
1	pon saranip	1.8 ℓ
2	saranip	9 ℓ
3	isaroykip	36 ℓ
4	poro saranip	108 ℓ
5	totta	630 ℓ

用途については、ras saranip⁽³⁾は硬質の素材で作られていて口縁部が開いた状態で自立するため穀物の収穫に使用するとし、穀物で一杯になるとisaroykipやporo saranipに移しながら作業を継続し、乾燥の後、tottaに収め倉庫に貯蔵したとしている(萱野 1978: 204-206)。これは用語の指し示す範囲にやや違いが見られるものの、おおむね林の聞き取った内容と一致している

(2) 杉山が提示した編機の写真図版は、糸の撚り方向や編みかけの資料の向きから見て「逆焼き」となっている可能性が高いため、本稿では反転したものを提示した。

(3) rasは「割り木」(中川 1995: 405)、「切れ端、割り板、割りは」(萱野 1996: 460)。『アイヌの民具』ではrashi saranipと表記されているが、後に刊行された『萱野のアイヌ語辞典』ではras saranipの語形で記載されているため(萱野 1996: 460)、本稿ではそちらに従った。



1 平取町二風谷／1978年（国立民族学博物館 H37485）



2 旭川市／1978年（国立民族学博物館 H62302）

図1 編袋の部位名称

ものということができる。

(5) 津田命子の研究

津田は、「サラニの種類と道具を使わない制作方法について」（津田 1996）の中で、編袋を「道具を使って編む」「道具を使わないで編む」の二つのグループに大別し、道具を使わないものは、「燃った糸を経糸にして製作されている例が多い」としたほか、千歳、静内、帯広の伝承者から聞き取った製作技術の一部を報告している。

(6) 荒山千恵の研究

荒山はハマニンク製の袋状、容器状製品について概略を報告するとともに、文献記録との対照を提示しており（荒山 2013、2016）、本稿で対象とする編袋の一部についても触れている。

(7) 課題

以上のように、先行研究では日高地方西部の沙流川流域を中心に、製作技術や容量による使い分けについて詳

細な記述がなされてきたものの、その他の地域に関する記述はいずれも断片的なものに留まっている。地域差に関する基本的な枠組みの提示が第一の課題となる。

また、先行研究は「伝統文化」の復元的な記述という性格が強いために、沙流川流域についても年代学的な変化についてはほぼ論じられていない。現存する資料に即した19世紀後半から現在に至るまでの年代学的変化の考察を、第二の課題とする。

2 対象資料の選定

博物館等が刊行している目録類、北海道教育委員会がまとめた民具資料所在調査などを参照して基礎的なリストを作成したうえで、背景情報を伴う資料が所蔵されている11の機関で資料調査を実施し、展示中などの理由で詳細な調査が困難なものを除外した286点について属性分析表をまとめた（表3）⁽⁴⁾。

なお、編袋は和人の文化にも「こだし」や「こだす」と呼ばれる類似製品が存在しており（名久井 2004ほか）、アイヌ民具として登録されている資料の中にも、

(4) 筆者が以前、刀帯や荷縄を分析した際には、海外の博物館等に所蔵される資料のうち鮮明な写真を確認可能なものを分布の検討の資料として用いたが、編袋は底部の鮮明な写真が確認できない場合には分類群の比定が困難なため、本稿では海外資料は対象としないこととし、参考として文中で触れるに留めた。

稲わらを素材とするなど和人が製作・使用した可能性を想定しなければならないものが混在している事例があった。このような資料が存在する背景には、アイヌ民族による製品の入手、製作技術の習得など、物質文化の変容を示すものである可能性も当然想定しなければならないが、そうした議論に進むためには確実にアイヌ民族が使用していたという情報が伴う資料に立脚する必要がある。今回調査した資料群にはこの条件を満たすものは存在せず、むしろ単なる背景情報の錯誤である可能性を排除できなかったため、全て対象から除外することとした⁽⁵⁾。

その他、分析の過程で他の資料との対比から背景情報に疑問が生じる場合があったが、分類の提示に先立って背景情報の訂正を加えれば根拠が明確でないまま最も基礎的な情報を操作することになってしまうため、属性分析表の段階では疑問符を付すに留め、分布の検討の段階で筆者の見解を示すこととした。

(1) 東京国立博物館所蔵資料

東博図版目録（東京国立博物館編 1992）によれば対象資料は9点含まれており、うち断片1点を除く8点の調査を実施した。収蔵時期は1875年が4点、1927年が4点となっている。

1875年収蔵資料には、他に類例がない「積丹郡」収集のデータを伴う資料が2点含まれている点が注目される。この年の収蔵資料は、三浦泰之が指摘しているように1873年に開催されたウィーン万博への出品を主な目的として収集された資料群の一部と考えられ、積丹方面での資料収集は1872年5月に実施されたことが明らかにされているもの（三浦 2001：186）、三浦が紹介した収集品目録「北海道産物」のリスト（三浦 2001：表2）には積丹郡収集の「サラ子upp」が1点のみ掲載されているのに対し、現在は2点（表3：1・3）に「積丹郡」のタグが付属しており、点数が一致なくなっている。本稿ではさしあたり、積丹郡収集という情報をそのまま掲載することとし、収集年として1872年を追加するが、このような数字の齟齬が存在していることには注意を促しておきたい。

1927年収蔵資料のうち1点（表3：7）は、東博図版目録では収集地の情報が記載されていなかったが、今回の調査で「地名 北海道沙流」「銅駄人類学教室」と記されたタグが確認されたため、これに依拠して情報を補った。

(2) 北大植物園・博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料は28点含まれており、全点の

調査を実施した。背景情報が明らかな資料は少ない。

(3) 市立函館博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料は18点含まれており、全点の調査を実施した。

2016年に収蔵された資料（表3：39）は、新ひだか町静内の女性から収集されたものとして寄贈された資料だが、極めてよく類似した資料が旭川市の女性の製作品として収蔵されている事例がある一方、新ひだか町の女性の作品であることが確実な資料との差が大きいため、背景情報の取り扱いには慎重な留保が必要である。これについては4（4）で詳述することとする。

(4) 国立民族学博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料が54点含まれており、展示中のものを含め全点の調査を実施した。

1930年代に言語学者の知里真志保を通して「アチックミュージアム」に収められた登別市幌別の資料（表3：55-60）など、他に類例がない希少なものを含む。

(5) 北海道博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料が86点含まれており、2018年10月までに所在が確認された85点について調査を実施した。

対象資料の中には、北海道開拓記念館が刊行した資料分類目録『民族Ⅰ』（北海道開拓記念館 1981）で収集地の情報が記載されているものが多数含まれるが、当時の担当者による推測に基づいた記載が多数含まれているため、紙台帳等で情報を裏付けることが可能なものを除き収集地の情報は削除することとした。

林善茂旧蔵資料のうち、林の著作への掲載が確認できる資料については、収集地が記載されているものは転記し、刊行年を収集年の下限として加えたうえで文献との対応関係を備考欄に記した（表3：163～165・190）。

(6) 旭川市博物館所蔵資料

所蔵資料のうち、目録（旭川市博物館 2000）掲載資料の中から展示中などの理由で調査が不可能だったものを除外した29点について調査を実施した。

(7) アイヌ民族文化財団所蔵資料

所蔵資料のうち、目録（財団法人アイヌ民族博物館 1991）が刊行されている児玉作左衛門旧蔵資料45点について調査を実施した。資料の収集年が明らかな資料は多くはないが、児玉が資料の収集を行っていたことが知

(5) 除外した資料は東京国立博物館所蔵資料1点（資料番号27981）、国立民族学博物館所蔵資料（同H25127）、北海道博物館所蔵資料（同182556）。

られる期間をこれにあてた。

(8) 新ひだか町博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料10点が含まれており、2018年9月の段階で所在が確認された9点について調査を実施した⁽⁶⁾。

(9) 浦河町立郷土博物館所蔵資料

所蔵資料には対象資料4点が含まれており、全点の調査を実施した。いずれも1976年から1978年の博物館開館にかけて浦河町内で収集されたものである（北海道教育委員会 1980：28-29）。

(10) 幕別町蝦夷文化考古館所蔵資料

所蔵資料目録（幕別町教育委員会 1992）に対象資料4点が含まれており、全点の調査を実施した。うち2点については幕別町内の女性が製作したことが明らかにされている。

(11) 幕別町ふるさと館所蔵資料

幕別町に在住した女性が寄贈した資料群に対象資料2点が含まれており、全点の調査を実施した。

3 分類

(1) 属性の設定

分類は、製作技術のうち地域差、年代差を強く反映すると判断した以下の属性によっておこなう。なお、底部から立ち上がり口縁部に向かう素材を「経材」、口縁部におおむね並行し、経材と組み合わせる素材を「緯材」と呼称する（図1）。

胴部構造（図2）

経材と緯材を組み合わせる技術を統合して「胴部構造」と呼称することとし、以下の分類を設定する。なお、編みの技術のうち編台を使用しないものについては、筆者が刀帯や荷縄、死者用靴の分析にあたって設定した技法名称（大坂 2017、2018a、2018b）を踏襲して記述する。

胴部構造 I a（図4：1・2）

直立する経材に対して2本の緯材を「ヨコモじり型」（吉本編 2013：19）で組み合わせて螺旋状に編み進め

るもののうち、編みが筆者分類（大坂 2018b）の「技法A'1」によるもの。緯材の進行方向は全て底部から口縁部に向かう⁽⁷⁾。本稿の分析対象資料では編み目は大部分が右下がりとなる

胴部構造 I b（図4：3）

直立する経材に対して2本の緯材を「ヨコモじり型」で組み合わせて螺旋状に編み進めるもののうち、編みが筆者分類（大坂 2017）の「技法A1」によるもの。該当する資料は1点のみで、編み目は右上がりとなる。

胴部構造 I c（図4：4）

直立する経材に対して2本の緯材を「ヨコモじり型」で組み合わせて螺旋状に編み進めるもののうち、編みが筆者分類（大坂 2017）の「技法B1」によるもの。該当する資料は1点のみで、編み目は右上がりとなる。

胴部構造 II a（図4：5）

直立する経材に対し、2本の緯材が平行をなし一段毎に完結する環状をなすもののうち、緯材の結束箇所が一列に揃うもの。編みの一部分のみを観察した場合には胴部構造 I aと区別することは困難だが、多数の緯材が平行していることから区別することができる。

なお、後述する II bとともに、編台を使用せずに「技法A'1」で等間隔に編むことで、見かけ上は区別がつかないものを編み上げることも技術的には可能であるが、緯材の間隔が整然と保たれている点からみて、編台を使用して「タテもじり型」（吉本編 2013：19）で編んだものを90度回転させた場合がほとんどと見て良いだろう。編台（図3：1）を用いて製作された場合には、底部は経材を適宜分岐させるか追加することで扇形に広がるように編み進め（図3：2）、平行に編み進めた胴部とともに緯材を結びとめるか、別材で結束することで成型する（図3：3）。

胴部構造 II b（図4：6）

直立する経材に対し、2本の緯材が平行をなし一段毎に完結する環状をなすもののうち、緯材の結束箇所が二列あるもの。編みの一部分のみを観察した場合には、胴部構造 I aと区別することは困難だが、多数の緯材が平行していることから区別することができる。編台を用いて製作した長方形の布状製品を折りたたみ、側面で緯材を結束することで底面長方形の箱形に成型する（図3：

(6) 調査にあたり、背景情報の一部を古原敏弘氏の教示によって補うことができたことを明記し、感謝申し上げます。

(7) 編みの方向は資料の上部から見て時計回り、反時計回りの双方が存在するが、樹皮内皮等の軟素材では、製作時に裏返すことが可能なため、資料の現状を製作時の作業方向と同一視することはできない。

4)。

胴部構造Ⅲ (図4:7)

一見すると編台で製作したゴザ様の製品を二つ折りにしたように見えるが、口縁部に並行する緯材に対して独立した2本の経材を「ヨコモじり型」で往復させつつ編みとめたものを素材としており、口唇部で経材が折り返す構造を認めることができる。

胴部構造Ⅳ (図4:8)

直立する経材に対して1本の緯材を螺旋状に編み進めるもの。編みは筆者分類 (大坂 2018b) の「技法G」による。

なお、以上の分類を名久井文明による技法分類 (名久井 2004) に照らし合わせると、胴部構造Ⅰ及びⅢは「編み芯独走方式」、胴部構造Ⅱは「編み芯併走方式」、胴部構造Ⅳは「組み」にそれぞれ該当するものと考えられる。

口縁部処理 (図5)

口縁部処理1 (図5:1・2)

口縁部を編み進めながら経材の端部を折り返したのち、1〜3本後の緯材に挟み込むもの。挟み込んだ後に内面側から外面に経材の端部を出して切断するものが多いが、端部の処理には変異が大きい。

口縁部処理2 (図5:3・4)

経材の上部で3〜6本の経材をまとめて三つ編みにし、更に経材の端部を折り返したのち、1〜3本後の緯材に挟み込むもの。口縁部処理1と3の中間的な様相と見なすこともできる。

口縁部処理3 (図5:5・6)

経材の上部で3〜6本の経材をまとめて三つ編みにし、更にそれらをまとめて三つ編みにしたもの。経材をまとめた際に編んだ部分が徐々に太くなることを防ぐために、一部を内面側に出して切断した痕跡が観察されるものが多い。

口縁部処理4 (図5:7)

上端部の緯材の直上で経材を切断したもの。該当する資料は全て比較的硬質のハマニンニクを素材としており、経材を交差させてX字状にすることで、経材が緯材から

抜け落ちることを防いでいるものと見られる⁽⁸⁾。

口縁部処理5 (図5:8)

経材の上部で隣接する経材を編みこんで装飾的な効果を出したもの。

(2) その他の属性

底部製作技術 (図13・14)

側面の経材を構成する素材を二方向に「タテヨコ直行型」(吉本編 2013:18) で組み合わせたものを「交差型」、「ヨコモじり型」(吉本編 2013:19) で組み合わせたものを「並列型」、底部の中心で経材を結わえ、経材が底部の中心を通らずに折り返す形となるものを「放射型」として記載する。放射型は内容物の重量を経材の中心で支えることができず、底部中心の緯材に大きな負荷がかかるため、同じ緯材を使用した場合、構造上「交差型」や「並列型」よりも強度で劣ることが予想される。底部が抜けることを防ぐ目的でやや太い緯材が使用されたとみられる資料が多いものの、断裂して大破した資料も少なくない。

経材素材

民族誌記録では、編袋の素材にはオヒョウ、シナノキ、ツルウメモドキ、ヤマブドウ等の木本、イラクサ、ハマニンニク、各種のスゲ等の草本、さらに近代以降にはトウモロシの果皮などが用いられていることが知られているが、現在のところこれらを同定する科学的な手法は見出されていない。本稿では、筆者の肉眼観察によって類似した植物を備考欄に記載しているもの、これは経験による感覚的な判断によるものであり、分析にあたって大きな判断基準とすることは避けておく必要がある。

内皮を加工せずに使用したものを「生皮」、煮沸や水漬処理によって加工したものを「繊維束」、それを撚り合わせた糸を「撚糸」として記載する。

緯材素材

鞣皮繊維を用いるものをA、木綿糸を用いるものをBとして記載する。

(8) この方法を軟質の素材に用いた場合、緯材が経材から容易に抜け落ちてしまうことが予想される。当然のことながら、技法の選択は素材の特性と密接に関わることに注意しておきたい。

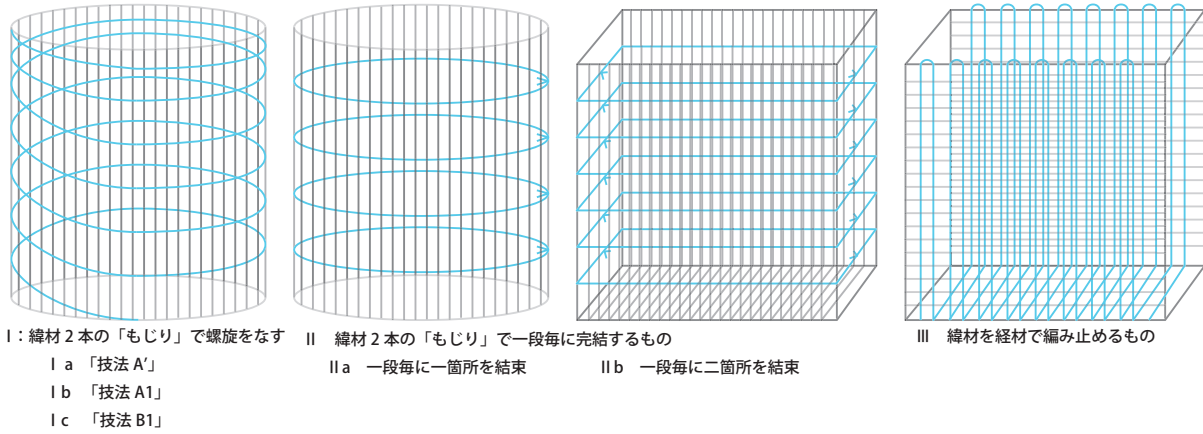
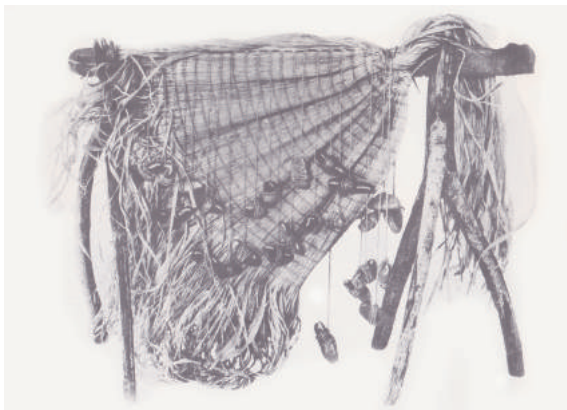


図2 経材と緯材の関係及び技法による胴部構造の分類



1 杉山 (1942) 掲載の編台を用いた製作過程



2 胴部構造 II a の底部から胴部への分岐 (北海道博物館 125835)



3 胴部構造 II a の緯材結束部 (北海道博物館 145790)



4 胴部構造 II b の緯材結束部外観 (旭川市博物館 7628)

図3 胴部構造 II a・II b の製作技術



1 胴部構造 I a (旭川市博物館 635)



2 胴部構造 I a (旭川市博物館 4861)



3 胴部構造 I b (市立函館博物館 民族 1208)



4 胴部構造 I c (新ひだか町博物館 11296)



5 胴部構造 II a (旭川市博物館 4863)



6 胴部構造 II b (アイヌ民族文化財団 61962)



7 胴部構造 III (北大植物園・博物館 9865)



8 胴部構造 IV (アイヌ民族文化財団 61998)

図4 胴部構造の例



1 口縁部処理 1 (旭川市博物館 7763)



2 口縁部処理 1 (旭川市博物館 7009)



3 口縁部処理 2 (北海道博物館 22881)



4 口縁部処理 2 (旭川市博物館 4855)



5 口縁部処理 3 (北大植物園・博物館 11000)



6 口縁部処理 3 (旭川市博物館 7428)



7 口縁部処理 4 (市立函館博物館 民族 1018)



8 口縁部処理 5 (市立函館博物館 民族 1208)

図5 口縁部処理のバリエーション

表3 属性分析表 (1)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	胴部構造						
									I			II		III	IV
									a	b	c	a	b		
1	東京国立博物館	I a1類	25699	横丹郡			1872年	1875年	○						
2			25700					1875年	○						
3			25701	横丹郡			1872年	1875年	○						
4		I a2類	27985					1927年	○						
5			27978					1927年	○						
6		I a3類	27982					1927年	○						
7			27979	沙流				1927年	○						
8		I a4類	25901				1872年	1875年	○						
9	北大植物園・博物館	I a1類	11005						○						
10			10445	新ひだか町静内				1933年	○						
11			11002						○						
12			11014						○						
13			11006						○						
14		I a2類	9888	日高					○						
15		I a3類	10993						○						
16			10998					1882年	○						
17			11008						○						
18			11009						○						
19			9864	日高					○						
20			10994						○						
21			10997					1882年	○						
22			10999					1882年	○						
23			11000	平取町				1937年	○						
24			11007						○						
25			11010						○						
26			11011						○						
27		I a4類	11104	伊達市有珠				1936年	○						
28		I b5類	9868	択捉島				1879年		○					
29		II a3類	A群	10625								○			
30				10995								○			
31				10996								○			
32				11001				1882年				○			
33				11012								○			
34				11013								○			
35				11015								○			
36		III類	9865	択捉島				1879年						○	
37	市立函館博物館	I a1類	民族766						○						
38			民族769						○						
39			H28-0079-003	新ひだか町静内?	織田ステノ?		1990年頃	2016年	○						
40			民族770						○						
41		I a2類	H29-0049	豊浦町礼文華				2017年	○						
42		I a3類	民族771						○						
43			H26-58				1944年以前?	2014年	○						
44		I a4類	民族1018	択捉島			1884年以前		○						
45			民族1019	択捉島			1884年以前		○						
46			民族1020	択捉島			1884年以前		○						
47		I b5類	民族1208	占守島			1876年以前			○					
48			民族1209	色丹島			1930～1940年代			○					
49		II a3類	B群	H10-51-08-04			1929～1970年	1998年				○			
50		IV1類	民族767												○
51			民族765												○
52		IV3類	民族764												○
53			H26-57				1944年以前?	2014年							○
54			H28-0073-5-29	平取町二風谷			1971年	2016年							○

口縁部処理					緯材		底部			備考
1	2	3	4	5	剥皮 A	木綿 B	交差	並列	放射	
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：シナ？、タグに「積丹郡」「サラ子ッブ 葡萄蔓ヲ以造フゴ」などの記載
○					○		○			経材：オヒョウ+ヤマブドウ、緯材：オヒョウ、タグに「第二百十八号 サラ子ッブ」などの記載
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：シナ？、タグに「積丹郡」「サラ子ッブ 葡萄蔓ヲ以造フゴ」などの記載
	○				○			○		経材：ガマ端部、緯材：シナ？
		○			○		○			経材：ガマ+黒染ガマ+赤染オヒョウ、緯材：シナ
		○			○			○		経材：ガマ端部、緯材：シナ？
		○			○			○		経材：シナ+ガマ、緯材：シナ+ガマ、タグに「北海道沙流 キナサラ ■■■」などの記載
			○		○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク
○					○		○			経材：シナ繊維束+一部黒染シナ（撚り）、緯材：シナ撚糸
○					○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○			○		経材：シナ生皮、緯材：シナ撚糸、緯材の間に染色した別材（シナ？）を通す
○					○			○		経材：シナ繊維束+一部黒染シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○				○	経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
	○				○		○			経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
		○			○		○			経材：オヒョウ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○		○			経材：オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ撚糸
		○			○		○			経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○		○			経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、10997に酷似
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、10994に酷似
		○			○			○		経材：ガマ、緯材：シナ？撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、裏返されている可能性あり
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：イラクサ？撚糸
		○			○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
			○		○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク
				○	○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク、市立函館博物館1208に酷似
		○			○				○	経材：シナ、緯材：シナ
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、裏返されている可能性あり、10996に酷似
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、裏返されている可能性あり、10995に酷似
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○				○	経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
—					○					経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク、編機を使用していない
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮？、緯材：不明、炭化物付着著しい
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：シナ撚糸
○					○		○			経材：ガマ端部、緯材：オヒョウ、新ひだか町静内の織田ステノ製作との情報が伴うが誤りと判断
○					○			○		経材：オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ？
	○				○		○			経材：シナ+麻+木綿（タコ糸）、緯材：体部〜口縁部麻+底部付近木綿、日高東部か
		○			○		○			経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
			○		○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク
			○		○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク
			○		○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク
				○	○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク、北大植物園9868に酷似
				○	○			○		経材：ハマニンニク、緯材：ハマニンニク、蓋付
		○				○			○	経材：シナ繊維束、緯材：底部シナ+胴部木綿糸（タコ糸）
○					○		○			経材：オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ生皮
○					○		○			経材：オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ生皮
		○			○		○			経材：シナ生皮、緯材：シナ生皮
		○			○		○			経材：シナ生皮、緯材：シナ生皮
		○			○		○			経材：シナ生皮、緯材：シナ生皮

表3 属性分析表 (2)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	胴部構造						
									Ⅰ			Ⅱ		Ⅲ	Ⅳ
									a	b	c	a	b		
55	国立民族学博物館	Ⅰ a1類	H0017065	登別市	金成モナシノウク		1935年	1975年	○						
56			H0017066	登別市			1935年	1975年	○						
57			H0017067	登別市			1935年	1975年	○						
58			H0018714	登別市			1935年カ	1975年	○						
59			H0018715	登別市			1935年カ	1975年	○						
60			H0018716	登別市			1935年カ	1975年	○						
61			H0035054	旭川市	M.T			1978年	○						
62			H0035055	旭川市	O.K			1978年	○						
63			H0062297	旭川市		S.M		1978年	○						
64			H0062298	旭川市		S.M		1978年	○						
65			H0062299	旭川市		S.M		1978年	○						
66			H0062302	旭川市		S.M		1978年	○						
67			H0065207	帯広市				1979年	○						
68			H0065208	帯広市				1979年	○						
69			K0001918					1903年	1975年	○					
70			H0277772	釧路市阿寒町		山本文利		2014年	○						
71			H0065209	帯広市				1979年	○						
72			H0189031	浦河町	浦川タレ	浦川太八		1993年	○						
73			H0189032	浦河町	浦川タレ	浦川太八		1993年	○						
74			H0189033	浦河町	浦川タレ	浦川太八		1993年	○						
75			K0001823					1975年	○						
76			H0277766	釧路市阿寒町		山本 文利		2014年	○						
77		Ⅰ a3類	H0011026				1935年	1977年	○						
78			H0025128	むかわ町蔭川	H.C	H.C	1952年	1975年	○						
79			H0062300	旭川市		S.M		1978年	○						
80			H0062301	旭川市		S.M		1978年	○						
81			H0277771	釧路市阿寒町		山本文利		2014年	○						
82			H0011067				1935年	1977年	○						
83			H0024392					1975年	○						
84			K0001853					1975年	○						
85			K0002111	平取町長知内			1927年	1975年	○						
86			H0011065				1935年	1977年	○						
87		Ⅱ a3類	A群	H0025157	平取町二風谷	N.T	二谷国松	1953年	1975年			○			
88				H0025579	平取町		H.M	1954年	1975年			○			
89				H0025900	平取町二風谷		二谷国松	1975年				○			
90				H0025901	平取町二風谷		二谷国松	1950年	1975年			○			
91				H0037485	平取町二風谷		萱野 茂	1978年				○			
92				H0037486	平取町二風谷		萱野 茂	1978年				○			
93				H0062388	平取町二風谷		萱野 茂	1978年				○			
94				H0062389	平取町二風谷		萱野 茂	1978年				○			
95				H0224233	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年				○			
96				H0224229	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年				○			
97			B群	H0189030	浦河町	浦川 タレ？	浦川太八	1993年				○			
98				H0224231	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年				○			
99		Ⅱ b3類	A群	H0224234	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年				○			
100				H0224232	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年				○			
101			B群	H0277767	釧路市阿寒町		山本文利	2014年				○			
102				H0277768	釧路市阿寒町		山本文利	2014年				○			
103				H0277769	釧路市阿寒町		山本文利	2014年				○			
104		Ⅳ3類		H0062349	平取町二風谷		萱野 茂	1978年						○	
105				H0158338	平取町二風谷			1988年						○	
106				H0224228	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年						○	
107				H0224235	平取町二風谷		貝澤守幸	2001年						○	
108				H0277773	釧路市阿寒町		山本文利	2014年							○

[illegible]

表3 属性分析表 (3)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	胴部構造						
									I			II		III	IV
									a	b	c	a	b		
109	北海道博物館	I a1類	8354					1969年	○						
110			8355					1969年	○						
111			8356					1969年	○						
112			9324					1969年	○						
113			11433					1970年	○						
114			22883					1971年	○						
115			22886					1971年	○						
116			23410	旭川市		A.M		1971年	○						
117			96305	浦河町	浦河タレ			1984年	○						
118			124723					1991年	○						
119			145792	旭川市				2002年	○						
120			145793	旭川市				2002年	○						
121			145794	旭川市				2002年	○						
122			145789					2002年	○						
123			22885					1971年	○						
124			11435					1970年	○						
125			9325					1969年	○						
126			22884					1971年	○						
127			22889					1971年	○						
128			23353	新ひだか町東静内		T.T		1971年	○						
129			56449	浦河町	浦河タレ			1977年	○						
130			68356	浦河町	浦河タレ			1979年	○						
131			68358	浦河町	浦河タレ			1979年	○						
132			96055	浦河町	浦河タレ			1984年	○						
133			96300	浦河町	浦河タレ			1984年	○						
134			96301	浦河町	浦河タレ			1984年	○						
135			124724					1991年	○						
136			33051					1972年	○						
137			22887					1971年	○						
138			22889					1971年	○						
139		I a2類	22888				1971年	○							
140			22881				1971年	○							
141		I a3類	11434				1970年	○							
142			11439				1970年	○							
143			23461	白糠町	四宅ヤエ		1971年	○							
144			44255	白糠町	四宅ヤエ		1974年	○							
145			44256	白糠町	四宅ヤエ		1974年	○							
146			145791				2002年	○							
147			182555				2017年	○							
148			11437				1970年	○							
149			11493	平取町		S.I	1944年	1970年	○						
150			11494	平取町二風谷			1944年	1970年	○						
151			22882					1971年	○						
152			23498					1971年	○						
153			126577				～1983年	1993年	○						
154			126578				～1983年	1993年	○						
155			126579				～1983年	1993年	○						
156			126580				～1983年	1993年	○						
157			126581				～1983年	1993年	○						

口縁部処理					緯材		底部			備考
1	2	3	4	5	割皮 A	木綿 B	交差	並列	放射	
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮+オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ撚糸、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮+オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ撚糸、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮+オヒョウ生皮、緯材：オヒョウ撚糸、映画「ユーカラの世界」撮影用小道具
○					○		○			経材：スゲ？撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○		○			経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
○					○		○			経材：ガマ端部撚糸、緯材：マニラ麻？撚糸
○					○		○			経材：ガマ端部撚糸+黒染シナ撚糸、緯材：シナ撚糸、浦河町立郷土博物館496に類似
○					○		○			経材：ガマ端部+オヒョウ、緯材：シナ、緯材の間に別材を差し込む
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：ヤマブドウ外皮、依託製作
○					○		○			経材：ヤマブドウ内皮、緯材：ヤマブドウ内皮
○					○		○			経材：ガマ端部+シナ？、緯材：シナ
○					○		○			経材：ガマ端部+シナ？、緯材：シナ
○					○		○			経材：ガマ端部、緯材：シナ
○					○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：麻+オヒョウ+一部にビニール紐、講座関連か
○					○		○			経材：ガマ、緯材：木綿糸（タコ糸）
○						○	○			経材：ガマ、緯材：木綿糸、緯材を一段毎に結束する
○					○			○		経材：スゲ？撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○			○		経材：トウモロコシ皮？撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○			○		経材：トウモロコシ皮？撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○			○		経材：トウモロコシ皮？撚糸、緯材：シナ撚糸、提げ紐：麻+木綿布、新ひだか町博物館10385～10387に類似
○					○			○		経材：不明、緯材：不明、依託製作
○					○			○		経材：カヤ、緯材：カヤ、依託製作
○					○			○		経材：オヒョウ、緯材：オヒョウ+麻？、依託製作
○					○			○		経材：ヤマブドウ外皮、緯材：ヤマブドウ外皮、依託製作
○					○			○		経材：カヤ、緯材：カヤ、依託製作
○					○			○		経材：ヤマブドウ外皮、緯材：ヤマブドウ外皮、依託製作
○					○			○		経材：ガマ、緯材：ガマ
○					○			○		経材：トウモロコシ皮？+シナ生皮、緯材：シナ撚糸
○					○				○	経材：ガマ端部撚糸、緯材：シナ撚糸
○					○				○	経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸、経材の黒染部分が腐食し欠落している
	○				○		○			経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
	○				○		○			経材：シナ撚糸+木綿糸（タコ糸）、緯材：シナ撚糸+底部のみ木綿糸（タコ糸）
		○			○		○			経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：シナ撚糸、大型
		○			○		○			経糸：ガマ、緯糸：ガマ、145791に類似
		○			○		○			経材：オヒョウ、緯材：オヒョウ、荷縄付属、依託製作
		○			○		○			経材：ヤマブドウ外皮、緯材：ヤマブドウ外皮、荷縄付属、依託製作
		○			○		○			経材：ガマ、緯材：ガマ、23461に類似
		○			○		○			経材：ヤマブドウ外皮+一部シナ繊維束、緯材：ヤマブドウ内皮
		○			○			○		経材：ヤマブドウ外皮、緯材：シナ？撚糸
		○			○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸、紙台帳によれば付属の荷札に「ボンカロップ」などの記載
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ撚糸、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸
		○			○			○		経材：シナ繊維束、緯材：シナ撚糸

表3 属性分析表 (4)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	胴部構造						
									I			II		III	IV
									a	b	c	a	b		
158	北海道博物館	II a3類	A群	11440				1970年				○			
159				11441				1970年				○			
160				23408	平取町二風谷			1971年				○			
161				33050				1972年				○			
162				68357	浦河町	浦河タレ		1979年				○			
163				109535	平取町		1959年以前	1985年				○			
164				109536	平取町		1959年以前	1985年				○			
165				109537			1959年以前	1985年				○			
166				126568	平取町二風谷	K.E	1970年	1993年				○			
167				126573			～1983年	1993年				○			
168				126574			～1983年	1993年				○			
169				126575			～1983年	1993年				○			
170				126584			～1983年	1993年				○			
171				126585			～1983年	1993年				○			
172		II a3類	B群	33049				1972年				○			
173				125837	平取町二風谷	長野チエ子		1992年				○			
174				125838	平取町二風谷	長野チエ子		1992年				○			
175				125839	平取町二風谷	長野チエ子		1992年				○			
176				125840	平取町二風谷	長野チエ子		1992年				○			
177				126570			～1983年	1993年				○			
178				126571			～1983年	1993年				○			
179				126572			～1983年	1993年				○			
180				126576			～1983年	1993年				○			
181				145790				2002年				○			
182				182558				2017年				○			
183				182559				2017年				○			
184				182560				2017年				○			
185		II b3類	B群	44253				1974年					○		
186				126569			～1983年	1993年					○		
187		IV3類		11436				1970年							○
188				11487	平取町荷負		1945年	1970年							○
189				23499				1971年							○
190				109538			1959年以前	1985年							○
191				126582			～1983年	1993年							○
192				126583			～1984年	1993年							○
193				130617			～1895年	1996年							○
194	旭川市博物館	I a1類		4862				1972年	○						
195				7009	旭川市	M.T		1981年	○						
196				7066	旭川市	M.T			○						
197				7427	旭川市	S.K	O.K		○						
198				7429	旭川市	S.K	O.K		○						
199				7765	旭川市	M.T			○						
200				4853				1972年	○						
201				4860				1972年	○						
202				4861				1972年	○						
203				4864	旭川市	K.M	1932年	1972年	○						
204				7490	旭川市				○						
205		I a2類		4855				1972年	○						
206				4870				1972年	○						
207				7739					○						
208		I a3類		635	旭川市	M.H		1953年	○						
209				4858				1972年	○						
210				4869	旭川市		K.A	1931年	○						
211				7426	旭川市	S.K	O.K		○						
212				7428	旭川市	S.K			○						
213				7425					○						
214				634	旭川市	M.H		1953年	○						
215				4854				1972年	○						
216		I a4類		4868				1972年	○						
217		II a3類	A群	4852				1972年				○			
218				4857				1972年				○			
219				4859				1972年				○			
220				4863				1972年				○			
221				7491	旭川市	K.M		1953年				○			
222		II b3類	A群	7628				1972年					○		

表3 属性分析表 (5)

	収蔵機関	分類	資料番号	収集地	製作者	所蔵者	収集年	収蔵年	胴部構造							
									I			II		III	IV	
									a	b	c	a	b			
223	アイヌ民族文化財団	I a1類	62003				1929～1970年	1981・1984年	○							
224			61993				1929～1970年	1981・1984年	○							
225			62002				1929～1970年	1981・1984年	○							
226		I a3類	61979				1929～1970年	1981・1984年	○							
227			61980				1929～1970年	1981・1984年	○							
228			61988				1929～1970年	1981・1984年	○							
229			61989				1929～1970年	1981・1984年	○							
230			61990				1929～1970年	1981・1984年	○							
231			61991				1929～1970年	1981・1984年	○							
232			61992	平取町荷負			1965年6月29日	1981・1984年	○							
233			61994				1929～1970年	1981・1984年	○							
234			61996	平取町荷負			1965年6月29日	1981・1984年	○							
235		I a4類	62121				1929～1970年	1981・1984年	○							
236		II a3類	A群	61970			1929～1970年	1981・1984年				○				
237				61971			1929～1970年	1981・1984年				○				
238				61972			1929～1970年	1981・1984年				○				
239				61973			1929～1970年	1981・1984年				○				
240				61974			1929～1970年	1981・1984年				○				
241				61975			1929～1970年	1981・1984年				○				
242				61976			1929～1970年	1981・1984年				○				
243				61977			1929～1970年	1981・1984年				○				
244				61978			1929～1970年	1981・1984年				○				
245				61981			1929～1970年	1981・1984年				○				
246				61982			1929～1970年	1981・1984年				○				
247				61983			1929～1970年	1981・1984年				○				
248				61984			1929～1970年	1981・1984年				○				
249				61985			1929～1970年	1981・1984年				○				
250				61986	平取町荷負		1965年6月29日	1981・1984年				○				
251				61987			1929～1970年	1981・1984年				○				
252				62093			1929～1970年	1981・1984年				○				
253				62094			1965年12月	1981・1984年				○				
254		II b3類	A群	61961			1929～1970年	1981・1984年					○			
255				61963			1929～1970年	1981・1984年					○			
256				61964			1929～1970年	1981・1984年					○			
257				61965			1929～1970年	1981・1984年					○			
258				61966			1929～1970年	1981・1984年					○			
259				61967			1929～1970年	1981・1984年					○			
260				61968			1929～1970年	1981・1984年					○			
261				61969			1929～1970年	1981・1984年					○			
262		IV3類	B群	61962			1929～1970年	1981・1984年					○			
263				61997			1929～1970年	1981・1984年							○	
264				61998			1929～1970年	1981・1984年							○	
265				61999			1929～1970年	1981・1984年							○	
266				62000			1929～1970年	1981・1984年							○	
267				62001			1929～1970年	1981・1984年							○	
268	新ひだか町博物館	I a1類	9754	新ひだか町静内	織田ステノ			1985年頃	○							
269			9763	新ひだか町静内	織田ステノ			1985年頃	○							
270			9769	新ひだか町静内	織田ステノ			1985年頃	○							
271			1321						○							
272			10385	新ひだか町静内		U.T		2006年	○							
273			10386	新ひだか町静内		U.T		2006年	○							
274			10387	新ひだか町静内		U.T		2006年	○							
275		I c類	11296	新ひだか町静内				2008年			○					
276	浦河町立郷土博物館	II a3類	B群	18119				2016年				○				
277		I a1類		495	浦河町上東栄	N.S			○							
278				496	浦河町上東栄	N.S			○							
279				2451	浦河町堺町	浦河タレ		1976年	○							
280		II a3類	A群	494	浦河町							○				
281	幕別町蝦夷文化考古館	I a1類		525					○							
282		I a3類		514	幕別町	H.K	1935～1965年	1965年	○							
283				516	幕別町	H.K	1935～1965年	1965年	○							
284		II a3類	B群	511	幕別町	S.S						○				
285	幕別町ふるさと館	I a1類	5574-5810	幕別町		安東ウメ子		2003年	○							
286		II a3類	B群	5575-5810	幕別町	安東ウメ子		2003年				○				

43

(3) 分類群の設定

上記で設定した属性の組み合わせをまとめると、以下の4大別11細別の分類群を設定することができる。対象資料286点のうち、緯材が螺旋状をなすⅠ類が168点(60.1%)、大部分が編台を使用したと考えられるⅡ類は91点(31.8%)を占め、両者を合わせて91.9%に達し、Ⅲ類及びⅣ類はごく僅かである。

■ Ⅰa1類 (図6、図7：1～6)

胴部構造Ⅰaで口縁部処理1のもの。対象資料のうち90点(31.5%)が該当する。

■ Ⅰa2類 (図7：7・8)

胴部構造Ⅰaで口縁部処理2のもの。対象資料のうち8点(2.8%)が該当する。

■ Ⅰa3類 (図8)

胴部構造Ⅰaで口縁部処理3のもの。対象資料のうち63点(22.0%)が該当する。

■ Ⅰa4類 (図9：1・2)

胴部構造Ⅰaで口縁部処理4のもの。対象資料のうち7点(2.4%)が該当する。

■ Ⅰb5類 (図10：1)

胴部構造Ⅰbで口縁部処理5のもの。対象資料のうち3点(1.0%)が該当する。

■ Ⅰc類 (図10：2)

胴部構造Ⅰcのもの。対象資料のうち1点(0.3%)が該当するが、口縁部は布で覆われており口縁部処理の分類が確認できないため、細分名称は提示しない⁽⁹⁾。

■ Ⅱa3類 (図9：3～6)

胴部構造Ⅱaで口縁部処理3のもの。対象資料のうち74点(25.9%)が該当する。緯材に鞣皮を用いるA群、木綿糸を用いるB群がある。

■ Ⅱb3類 (図9：7・8)

胴部構造Ⅱbで口縁部処理3のもの。対象資料のうち17点(5.9%)が該当する。緯材に鞣皮を用いるA群、木綿糸を用いるB群がある。

■ Ⅲ類 (図10：3)

胴部構造Ⅲのもの。対象資料のうち1点(0.3%)が該当する。

■ Ⅳ1類 (図10：4)

胴部構造Ⅳで口縁部処理1のもの。対象資料のうち2点(0.7%)が該当する。

■ Ⅳ3類 (図10：5～7)

胴部構造Ⅳで口縁部処理3のもの。対象資料のうち20点(7.0%)が該当する。

この分類を1(4)で確認した萱野分類と対照すると、Ⅰa3類のうち経材に撚糸を用いるものがceoske saranip⁽¹⁰⁾、Ⅱa3類のうち経材に繊維束を用いるものがsaranip、Ⅳ3類がras saranipに該当するものとみられる。

ただし、萱野の生活体験地と同じ沙流川流域でも、Ⅰa3類の経糸に繊維束を用いたもの(図8：3・4)やⅡa3類の経糸に撚糸を用いたもの(図9：3)のように、萱野の定義から外れる資料も少なからず存在しており、後者について川上まつ子はcekaka saranipと呼称している⁽¹¹⁾。同じ沙流川流域で記録されたkásaranipの名称は「木の皮の繊維をそのまま使わず糸によったものでつくった『小出し』」とされ(田村 1996：282)、萱野によるceoske saranip、川上によるcekaka saranipと重なるものである可能性がある。

記述されてきた内容とは異なった特徴を示す資料や、着眼点異なるアイヌ語名称の存在が確認されている状況の中で、分類群に特定の文献で提示されたアイヌ語名称に引き当てることは、本来アイヌ語名称が意味していた範囲を歪める危険があるうえ、研究用語が不適切に引用され少数民族言語の「標準語化」として作用する恐れさえある。そこで本稿では各分類群にアイヌ語名称を引き当てることは控え、分類名称をそのまま使用して以下の記述を進めることとする。

(9) 本資料はアイヌ民族の民具資料の中に類例が知られていないため、和人を含む他民族が製作したものである可能性を完全には否定できない。この点については別稿を参照のこと(大坂 2018c)。

(10) ceoske saranipの名称は、ci-e-oske-saranipと分解されることもあるが、oskeは他動詞なので語形に疑問が残る。

(11) アイヌ民族博物館アイヌ語アーカイブ(資料番号2000P)「川上まつ子のサラニプオシケ(ガマの撚糸による袋編み)」(URL: <http://ainugo.ainu-museum.or.jp/search/media?title=&dialect=&person=&keyword=&typeVideo=on#>) (2018年12月29日閲覧)。

I a1 類



1 旭川市／収集年不明（旭川市博物館 7765）



2 旭川市／1978年（国立民族学博物館 H35054）



3 旭川市／1978年（国立民族学博物館 H35055）



4 登別市／1935年（国立民族学博物館 H17065）



5 登別市／1935年（国立民族学博物館 H17066）



6 登別市／1935年（国立民族学博物館 H17067）



7 登別市／1935年（国立民族学博物館 H18716）



8 登別市／1935年（国立民族学博物館 H18715）

図6 編袋の分類（1）



1 新ひだか町静内／2006年（新ひだか町博物館 10385）



2 新ひだか町東静内／1971年（北海道博物館 23353）



3 新ひだか町静内／1933年（北大植物園博物館 10445）



4 新ひだか町静内／1985年頃（新ひだか町博物館 9754）



5 浦河町／収集年不明（浦河町立郷土博物館 495）



6 浦河町／1979年（北海道博物館 68356）

I a2 類



7 日高／収集年不明（北大植物園・博物館 9888）



8 豊浦町礼文華／2017年（市立函館博物館 H29-0049）

図7 編袋の分類（2）

I a3 類



1 平取町／1944 年（北海道博物館 11493）



2 むかわ町鶴川／1952 年（国立民族学博物館 H25128）



3 平取町二風谷／1944 年（北海道博物館 11494）



4 平取町長知内／1927 年（国立民族学博物館 K2111）



5 平取町／1937 年（北大植物園・博物館 11000）



6 収集地不明／1935 年（国立民族学博物館 H11067）



7 旭川市／1953 年（旭川市博物館 634）



8 白糖町／1974 年（北海道博物館 44255）

図8 編袋の分類（3）

I a4 類



1 択捉島／1884 年以前（市立函館博物館 民族 1018）



2 伊達市有珠／1936 年（北大植物園・博物館 11104）

II a3 類



3 平取町二風谷／2001 年（国立民族学博物館 H224233）



4 平取町二風谷／1971 年（北海道博物館 23408）



5 平取町二風谷／1953 年（国立民族学博物館 H25157）



6 平取町二風谷／収集年不明（国立民族学博物館 H25900）

II b3 類



7 収集地不明／1972 年（旭川市博物館 7628）



8 平取町二風谷／2001 年（国立民族学博物館 H224232）

図9 編袋の分類 (4)

I b5 類



1 色丹島／1930-1940 年（市立函館博物館 民族 1209）

I c 類



2 新ひだか町静内／2008 年（新ひだか町博物館 11296）

III 類



3 択捉島／1879 年（北大植物園・博物館 9865）

IV1 類



4 収集地不明／収集年不明（市立函館博物館 民族 767）

IV3 類



5 収集地不明／1895 年以前（北海道博物館 130617）



6 収集地不明／1959 年以前（北海道博物館 109538）



7 平取町荷負／1945 年（北海道博物館 11487）

図10 編袋の分類 (5)

4 分類群間の地域差・年代差

(1) 分布図の作成

ここまで検討した分類群の相互の関係を明らかにするため、以下では収集地・収集年代の情報が伴う資料110点(表4)を対象として、分布図を作成する。なお、分析の結果に年代差が混入することを防ぐため、分布図は1870～1940年代、1950～1970年代、1980～2010年代の三時期に区分する。

(2) サハリンにおける空白

サハリンで収集されたことが確実な資料は現在まで確認できていない。もっとも、サハリンアイヌの人々が作成したとされる熊送儀礼の熊神用飾帯に、オオカサスゲ⁽¹²⁾を素材とする小型の編袋を熊神の「弁当包み」として取り付けた事例⁽¹³⁾が確認できることから、I a類の製作技術が存在したことそのものは疑いない。このような特殊な製品のみが収集されている理由としては、日常生活では樹皮製容器などの比率が高かったために、北海道アイヌに比べて編袋を使用する頻度が低く、資料が収集されにくかったという可能性を考えておきたい。

(3) 千島列島収集資料の特徴と断絶

千島列島では、多数のI a4類の他、北海道本島には類例がないI b5類、III類が収集されており、製作技術の地域の特徴を明確に看取することができる。素材に例外なくハマニンニクが用いられている点は、樹木が極端に少ない寒冷な島嶼環境への適応を示すものとみられ、その点でも他地域との差異が大きい。

I a4類は、荒山によって近世期の絵画に現れるものに比定されてきた経緯がある(荒山 2016: 54-56)。収集地が絞り込みにくいために本稿の分析対象からは除外したものの、収集年代が近世に遡る実物資料も須田正美家アイヌ関連資料(財団法人アイヌ民族文化財団編 2018: 192)や菅茶山旧蔵広島県立歴史博物館所蔵資料などが知られており、近世末期から1880年代にかけて多数が収集されていることは注目しておきたい。類例として、北海道本島の伊達市有珠で収集された資料がI点存在するものの(図9: 2)、中間地点での資料を欠く「迷点」をなしており、この資料によって分布域が胆振地方まで延びていたと断言することは控えておく。

I b5類の3点のうち2点は、1884年のクリルアイヌの

色丹島への強制移住に先立つ1870年代後半に占守島と択捉島でそれぞれ収集された資料とされ、極めて類似した特徴を示している(図15: 1・2)。2点の背景情報が正しいとすれば、1803年の択捉島・得撫島間での分断から70年以上を経たのちなお、千島列島北端の占守島とそこから約550kmを隔てた択捉島のアイヌ民族が極めて高い技術的共通性を維持していたと考えることになるが、資料数が少ない現状ではこれについても踏み込んだ判断を避け、広く千島列島に由来する資料として把握しておくのが穏当だろう。

III類はI点のみであるが、共通する製作技術の特徴を示す、すだれ状の編み物を三つ折りにした容器の類例が千島列島で複数知られており⁽¹⁴⁾、そうした資料と関連があるものと考えておく。

千島列島にほぼ固有のこれ等の分類群は1950年代以降には全く収集されていないが、その背景には、1945年の日本敗戦に伴う住民の北海道本島以南への移住と、それによる生活様式の激変が影響を与えている可能性がある。2000年前後になって知里真希による復元的研究が行われるまで、これらの分類群の製作技術は完全に失われていた。

(4) 北海道本島内の地域差

北海道本島では、I a1類、I a2類、I a3類、II a3類、II b3類、IV3類など、多数の分類群が収集されており、積丹半島や登別でI a1類、白糠でI a3類のみが収集されている一方で、沙流川流域や旭川市、十勝地方では複数の分類群が同時期に収集されている。編袋は基本的には消耗品と考えられ、宝物として取り扱われる刀帯で認められたような製作年代が異なる分類群の同時存在(大坂 2017: 24)の可能性を考慮する必要はない。残されるのは、A.複数の分類群が地域内で製作されていた、B.製作地が異なる分類群が地域を超えて流通していた可能性となる。

沙流川流域で収集された資料は、I a3類、II a3類、IV3類で、全て「口縁部処理3」という属性を共有しており、素材の違いを超えた地域色が認められることから、これらは全て同一地域内で、用途などを異にするものとして製作・使用されていたものと考えられる。

I a1類の硬質の素材を用いたものでは、登別市で収集された資料では底部から胴部を立ち上げる際に経材を細かく裂いて本数を増やすのに対し(図6: 4～7)、旭

(12) スゲ科植物は同定が困難なことで知られる。ここでは知里真志保による熊神用飾帯に関する記述(知里 1976: 218)に依拠したが、それが真にオオカサスゲなのか、類似した複数の種のスゲを含むのかは留保が必要である。なお、この記述の存在はアイヌ民族文化財団の山道陽丸氏のご教示によって知った。明記して山道氏に感謝申し上げる。

(13) 北海道立北方民族資料館所蔵資料番号E562。

(14) 国立民族学博物館所蔵の資料番号K2320(小杉 1997: 図版14)、ロシア科学アカデミー人類学博物館所蔵の資料番号809.15、820.9(SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998)。これらの資料については、ゴザ類との関連で別稿において詳述することとした。

表4 背景情報が明らかな資料一覧

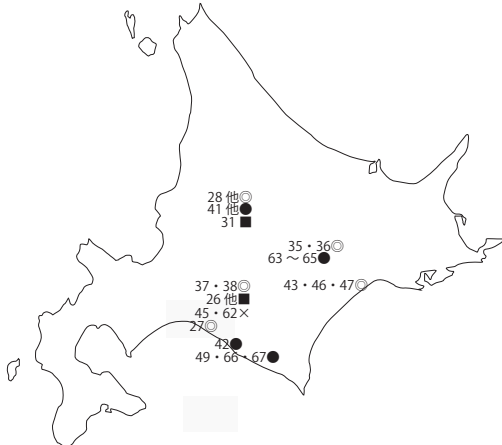
	収集地	収集／収蔵年	収蔵機関	資料番号	分類
1	積丹郡	1875年	東京国立博物館	25699	I a1類
2	積丹郡	1875年	東京国立博物館	25701	I a1類
3	占守島	1876年以前	市立函館博物館	民族1208	I b5類
4	択捉島	1879年	北大植物園・博物館	9868	I b5類
5	択捉島	1879年	北大植物園・博物館	9865	Ⅲ類
6	択捉島	1884年以前	市立函館博物館	民族1018	I a4類
7	択捉島	1884年以前	市立函館博物館	民族1019	I a4類
8	択捉島	1884年以前	市立函館博物館	民族1020	I a4類
9	沙流	1927年	東京国立博物館	27979	I a3類
10	平取町長知内	1927年	国立民族学博物館	K0002111	I a3類
11	旭川市	1931年	旭川市博物館	4869	I a3類
12	旭川市	1932年	旭川市博物館	4864	I a1類
13	新ひだか町静内	1933年	北大植物園・博物館	10445	I a1類
14	登別市	1935年	国立民族学博物館	H0017065	I a1類
15	登別市	1935年	国立民族学博物館	H0017066	I a1類
16	登別市	1935年	国立民族学博物館	H0017067	I a1類
17	登別市	1935年カ	国立民族学博物館	H0018714	I a1類
18	登別市	1935年カ	国立民族学博物館	H0018715	I a1類
19	登別市	1935年カ	国立民族学博物館	H0018716	I a1類
20	伊達市有珠	1936年	北大植物園・博物館	11104	I a4類
21	平取町	1937年	北大植物園・博物館	11000	I a3類
22	平取町	1944年	北海道博物館	11493	I a3類
23	平取町二風谷	1944年	北海道博物館	11494	I a3類
24	平取町荷負	1945年	北海道博物館	11487	IV3類
25	色丹島	1930-1940年代	市立函館博物館	民族1209	I b5類
26	平取町二風谷	1950年	国立民族学博物館	H0025901	Ⅱa3類
27	むかわ町鶴川	1952年	国立民族学博物館	H0025128	I a3類
28	旭川市	1953年	旭川市博物館	635	I a3類
29	旭川市	1953年	旭川市博物館	634	I a3類
30	平取町二風谷	1953年	国立民族学博物館	H0025157	Ⅱa3類
31	旭川市	1953年	旭川市博物館	7491	Ⅱa3類
32	平取町	1954年	国立民族学博物館	H0025579	Ⅱa3類
33	平取町	1959年以前	北海道博物館	109535	Ⅱa3類
34	平取町	1959年以前	北海道博物館	109536	Ⅱa3類
35	幕別町	1935-1965年	幕別町蝦夷文化考古館	514	I a3類
36	幕別町	1935-1965年	幕別町蝦夷文化考古館	516	I a3類
37	平取町荷負	1965年	アイヌ民族文化財団	61992	I a3類
38	平取町荷負	1965年	アイヌ民族文化財団	61996	I a3類
39	平取町荷負	1965年	アイヌ民族文化財団	61986	Ⅱa3類
40	平取町二風谷	1970年	北海道博物館	126568	Ⅱa3類
41	旭川市	1971年	北海道博物館	23410	I a1類
42	新ひだか町東静内	1971年	北海道博物館	23353	I a1類
43	白糠町	1971年	北海道博物館	23461	I a3類
44	平取町二風谷	1971年	北海道博物館	23408	Ⅱa3類
45	平取町二風谷	1971年	市立函館博物館	H28-0073-5-29	IV3類
46	白糠町	1974年	北海道博物館	44255	I a3類
47	白糠町	1974年	北海道博物館	44256	I a3類
48	平取町二風谷	1975年	国立民族学博物館	H0025900	Ⅱa3類
49	浦河町	1977年	北海道博物館	56449	I a1類
50	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062297	I a1類
51	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062298	I a1類
52	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062299	I a1類
53	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062302	I a1類
54	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062301	I a3類
55	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0062300	I a3類

	収集地	収集／収蔵年	収蔵機関	資料番号	分類
56	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0035054	I a1類
57	旭川市	1978年	国立民族学博物館	H0035055	I a1類
58	平取町二風谷	1978年	国立民族学博物館	H0037485	Ⅱa3類
59	平取町二風谷	1978年	国立民族学博物館	H0037486	Ⅱa3類
60	平取町二風谷	1978年	国立民族学博物館	H0062388	Ⅱa3類
61	平取町二風谷	1978年	国立民族学博物館	H0062389	Ⅱa3類
62	平取町二風谷	1978年	国立民族学博物館	H0062349	IV3類
63	帯広市	1979年	国立民族学博物館	H0065207	I a1類
64	帯広市	1979年	国立民族学博物館	H0065208	I a1類
65	帯広市	1979年	国立民族学博物館	H0065209	I a1類
66	浦河町	1979年	北海道博物館	68356	I a1類
67	浦河町	1979年	北海道博物館	68358	I a1類
68	浦河町	1979年	北海道博物館	68357	Ⅱa3類
69	旭川市	1981年	旭川市博物館	7009	I a1類
70	浦河町	1984年	北海道博物館	96305	I a1類
71	浦河町	1984年	北海道博物館	96055	I a1類
72	浦河町	1984年	北海道博物館	96300	I a1類
73	浦河町	1984年	北海道博物館	96301	I a1類
74	新ひだか町静内	1985年頃	新ひだか町博物館	9754	I a1類
75	新ひだか町静内	1985年頃	新ひだか町博物館	9763	I a1類
76	新ひだか町静内	1985年頃	新ひだか町博物館	9769	I a1類
77	平取町二風谷	1988年	国立民族学博物館	H0158338	IV3類
78	新ひだか町静内?	1990年頃	市立函館博物館	H28-0079-003	I a1類
79	平取町二風谷	1992年	北海道博物館	125837	Ⅱa3類
80	平取町二風谷	1992年	北海道博物館	125838	Ⅱa3類
81	平取町二風谷	1992年	北海道博物館	125839	Ⅱa3類
82	平取町二風谷	1992年	北海道博物館	125840	Ⅱa3類
83	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189031	I a1類
84	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189032	I a1類
85	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189033	I a1類
86	浦河町	1993年	国立民族学博物館	H0189030	Ⅱa3類
87	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224234	Ⅱb3類
88	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224232	Ⅱb3類
89	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224233	Ⅱa3類
90	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224229	Ⅱa3類
91	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224231	Ⅱa3類
92	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224228	IV3類
93	平取町二風谷	2001年	国立民族学博物館	H0224235	IV3類
94	旭川市	2002年	北海道博物館	145792	I a1類
95	旭川市	2002年	北海道博物館	145793	I a1類
96	旭川市	2002年	北海道博物館	145794	I a1類
97	幕別町	2003年	幕別町ふるさと館	5574-5810	I a1類
98	幕別町	2003年	幕別町ふるさと館	5575-5810	Ⅱa3類
99	新ひだか町静内	2006年	新ひだか町博物館	10385	I a1類
100	新ひだか町静内	2006年	新ひだか町博物館	10386	I a1類
101	新ひだか町静内	2006年	新ひだか町博物館	10387	I a1類
102	新ひだか町静内	2008年	新ひだか町博物館	11296	I c類
103	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277772	I a1類
104	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277766	I a1類
105	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277771	I a3類
106	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277767	Ⅱb3類
107	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277768	Ⅱb3類
108	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277769	Ⅱb3類
109	釧路市阿寒町	2014年	国立民族学博物館	H0277773	IV3類
110	豊浦町礼文華	2017年	市立函館博物館	H29-0049	I a2類

《1870～1940年代》



《1950～1970年代》



《1980～2010年代》

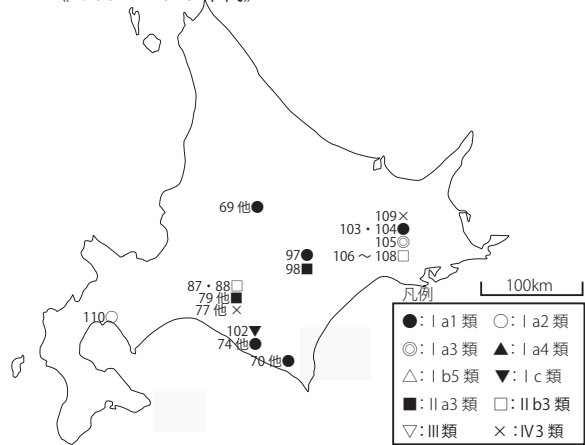


図11 分布図（番号は表4に対応）

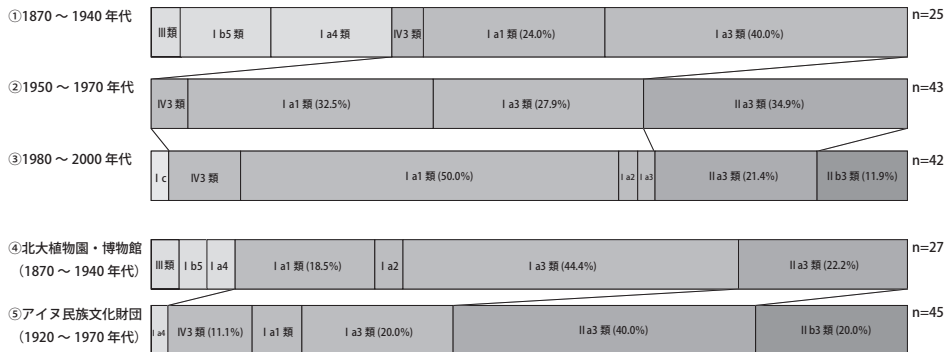


図12 収集年代別組成比と収蔵機関別組成比



1 交差型 (国立民族学博物館 H62299)



2 交差型 (北海道博物館 145793)



3 交差型 (国立民族学博物館 H18715)



4 交差型 (新ひだか町博物館 9754)



5 交差型 (新ひだか町博物館 民族 9769)



6 並列型 (北海道博物館 23353)



7 放射型 (北海道博物館 22890)



8 放射型 (北海道博物館 22887)

図13 I a1類の底部バリエーション



1 交差型（北海道博物館 44255）



2 交差型（国立民族学博物館 H25128）



3 並列型（北海道博物館 126579）



4 放射型（国立民族学博物館 H11065）

図14 I a3類の底部バリエーション

川市などで収集された資料では底部にやや細い素材を使用し、側面にそのままの本数で立ち上げていく差異を認めることもできる（図6：1・2）。

やや地域を広く捉えて形態と素材に着目すると、北海道南西部と北海道東部では底面が長方形を呈し、シナやオヒョウの内皮、ヤマブドウの外皮といった比較的硬質の素材が多用される傾向があるのに対し（図6：1・2・4～7、図8：7・8）、日高地方では底面が円形に近く、シナの内皮を加工した繊維束や撚糸など軟質の素材を用いるものが高比率を占める傾向が看取される（図7：1～5、図8：1～5）。

このような細かなレベルでの地位差の存在は、後述するⅡ類を除けば、編袋が基本的には各地域内で生産、消費されていたことを反映するものと考えられよう。

以上の結果を応用し、資料の特徴によって背景情報に訂正を要する可能性がある資料の存在を指摘しておく。市立函館博物館所蔵の資料には新ひだか町静内に居住した織田ステノが製作したとの情報を伴う底部が長方形の資料が含まれるが（図15：3）、織田が製作したことが確実な資料はいずれも底部が方形を呈するなど（図13：4・5）、全く異なった特徴を示す（図7：4）。一方、旭川市在住の人物が製作した資料（図15：4）とは細部

に至るまで特徴が一致していることからみて、この資料の背景情報は誤りである可能性が高いものと判断し、分布図から除外した。



1 占守島／1876 年以前（市立函館博物館 民族 1208）



2 択捉島／1879 年（北大植物園・博物館 9868）



3 新ひだか町静内？／2016 年（市立函館博物館 H28-0079-003）



4 旭川市／1981 年（旭川市博物館 7009）

図15 背景情報の取り扱いに注意を要する資料



1 II a3 類 (北海道博物館 126575・126570)



2 II b3 類 (北海道博物館 126569)



3 II a3 類 (アイヌ民族文化財団 61970)



4 II a3 類 (新ひだか町博物館 18119)

図16 販売時のタグが付属する資料他

5 II類の「土産物」・「伝統工芸品」化

(1) II a3類の拡散

編台を用いて製作されるII a3類は、背景情報が明確な資料に限った集計では1950年代以降に現れたかのように見えるものの(図12:②)、ほぼ全ての資料が1940年代以前に収集されたと考えられている北大植物園・博物館収蔵資料に7点が含まれており(図12:④)、その中には、収集地は不明ながら1882年収集の記録を有するものも存在することから、19世紀後半には既に存在したことは間違いない。一方で、いずれの集計方法でも、年代が下るとその比率が大きく増加していることも認められる。

II a3類は、製作技術上の大きな相違にも関わらず、形状はI a3類に極めて良く類似しているが、1920～1950年代に収集された資料では相対的に小型のものがI a3類(図8:1～5)、大型のものがII a3類(図9:5・6)となる傾向が認められる。この点については、II a3類は底部中央の緯材が断裂すると文字通り「底が抜けた」状態となる構造的な欠点を抱えているものの、大型

の編袋をI類の製作技術で吊り下げて製作するのも困難であることから、一度設置すればあまり動かさずに使用する貯蔵用に特化したものとして製作されていた可能性が考えられよう。

1980年代以降になるとI a3類の比率が目立って低下するとともに(図12:③)、代わって小型のものにもII a3類が目立つようになり、これ以降の年代に収集された資料では、緯材に木綿糸を用い、経材の繊維は著しく細いものが多数を占めるようになる(図16:1右・3・4)。

筆者の2018年度の調査では、1970年代当時の平取町二風谷での工芸品製作の風景を記憶している世代の人々から、工芸品の製作で著名だった貝澤ハギが、編台を使用し木綿糸を緯材に用いたII a3類B群を盛んに製作していたことや、反対にI a3類を製作するのを見たことがないことなどを聞き取ることができた。当時は土産物としての需要が多く、二風谷だけでなく、周辺の集落の高齢者が内職のように製作したものを取りまとめ、旭川や白老、阿寒などに販売していたという⁽¹⁵⁾。

II a3類の増加の背景には製作に要する時間的コスト

(15) これ等の点については、2018年12月に貝澤ハギ氏の孫にあたる工芸作家の貝澤徹氏からご教示を受けたことを明記し、感謝申し上げます。



左：1993年 長野ちえこ作（北海道博物館 125838）、右：2018年 藤谷るみ子作（個人蔵）

図17 平取町二風谷で製作されているⅡa3類

の相対的な小ささがあり、編袋が日常生活の中で使用されるものから土産物に変化する中で強度を持たせる必要性が低下したことによって経材は薄く、細いものへ変化していった可能性が高い。さらに、緯材に市販の木綿糸を使用することでコストの更なる削減が達成されたものと見られる。

旭川市の民芸品販売店「チカラベ舎」が所有していた民具類のうち、Ⅱa3類は平取町で入手したか、平取から出稼ぎに来ていた人物が製作したものとされており（財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構2001）、製品の仕入れや製作技術保持者の出稼ぎなど、様々なルートでこのタイプが拡散したことが伺われる。

同様に編台を使用するⅡb3類は、1940年代以前の資料には全く含まれておらず、確実な資料は1980年代以降に出現する。これはⅡa3類が増加する時期と重なっており、商品としての大量生産を目的として編台を使用した技術が盛んになる中で、新たに開発されたものである可能性が高い。

（2）製作技術の継承と素材の転換

2015年から2018年にかけて筆者が実施した調査では、釧路市阿寒、浦河町、白老町ではⅠa1類、平取町二風谷ではⅠa3類、Ⅱa3類、Ⅱb3類、Ⅳ3類が製作されていることが確認された。このうち白老町の技術は、1980

年代に新ひだか町静内の女性が財団法人アイヌ民族博物館（当時）で勤務していた際に、職員が技術研修を受けて習得したものであり、近年の技術移転による分布圏の変化の例である。

平取町では、現在も博物館収蔵資料と同様の各種の分類群が製作されているが、素材としてオヒョウの内皮が使用される場合が多くなっている。沙流川流域では、博物館収蔵資料と民族誌記録の双方から、19世紀後半～20世紀を通じシナノキが主な素材として多用されてきたことが確認できることから、近年になってシナノキからオヒョウへの素材の転換が起こったことになる。

平取町では近年、樹皮布のアットウシの生産を目的として、工芸組合が中心となってオヒョウ樹皮の国有林からの採取を計画的に進めるようになったことで工芸家がオヒョウの樹皮を入手することが容易になった一方、シナノキの樹皮の採取は稀になっているという⁽¹⁶⁾。この影響が編袋にも素材の転換となって表れたものだが、一方で、編袋は昔からシナノキを素材にしてきたという認識を強く持って、シナノキを素材とする製品も作り続けている工芸作家もいる（図17：右）。変化は現在も進行しているのである。

(16) 2018年6月に貝澤守氏の教示を受けたことを明記し、感謝申し上げる。

おわりに

本稿の結果をまとめると、以下のようになる。

- 1) アイヌ民族の編袋は、サハリンには資料が存在せず、千島列島と北海道の間に相対的に大きな技術的な差異が存在する。
- 2) I a4類、I b5類、III類の製作技術は1950年代以降に断絶しており、その背景には日本敗戦に伴う住民の千島列島から北海道以南への移住の影響が想定される。
- 3) I類は北海道全島に広く分布し、口縁部処理や底部の形態などに地域差が認められた。
- 4) 1950～80年代以降、II a3類の比率が増加するとともに、分布が広域化する背景には、土産物として編台を利用して手早く編み上げることが可能なこの類型が選択的に大量生産され、広域に流通するとともに、一部では製作者の他の観光地への移動などが介在する形で普及したことが明らかになった。
- 5) II b3類は1980年代前後に出現し、現在まで製作されている。
- 6) 平取町では、2000年代に入り、オヒョウ内皮への素材の転換が進んでいるが、シナノキ内皮の利用を伝統的な物と考える製作者もあり、二種の素材が共存した状態となっている。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、奥田統己、北原次郎太、貝澤徹、貝澤守、古原敏弘、高野啓子、藤谷るみ子、関根真紀の諸氏よりご教示を賜ったほか、資料調査に際して所蔵機関の飯岡郁穂（旭川市博物館）、伊藤昭和（浦河町立郷土博物館）、加藤克（北海道大学北方生物圏フィールド科学センター）、齋藤玲子（国立民族学博物館）の諸氏からご協力を賜りました。末筆ながら記して感謝申し上げます。ただし、存在する全ての誤りは筆者に帰する。

本研究はJSPS科研費JP18K12558「考古学的分析手法を導入した博物館収蔵アイヌ民具資料の基礎的研究」（研究代表者：大坂拓）による成果の一部である。

引用文献

- 旭川市博物館 2000. 旭川市博物館所蔵品目録XI—民族資料／携行品関係—。
- 荒山千恵 2013. ハマニニック製の容器「テンキ」—テーマ展「アイヌの工芸テンキ」及び関連事業からの報告—。いしかり砂丘の風資料館紀要3:55-64。
- 荒山千恵 2016. ハマニニックの利用と「テンキ」—18世紀後半の絵図・記述を中心にして—。北海道民俗学 12:50-59。

- SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録。草風館。
- 大坂 拓 2017. アイヌ民族の刀帯—分類群の共時的分布と通時的分布—。北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要 2:1-32。
- 大坂 拓 2018a. アイヌ民族の荷縄—地域差と年代差、及び用途による形態差に関する基礎的検討—。北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要3:19-50。
- 大坂 拓 2018b. 北海道アイヌの「死者用靴」—日高東部地域の東方系出自集団に固有の死装束とその周辺—。北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要3:51-72。
- 大坂 拓 2018c. 北海道新ひだか町静内収集の編袋。北海道博物館アイヌ民族文化研究センター紀要3:135-138。
- 大矢京右 2017. 児玉コレクションの収集経過とその周辺。市立函館博物館研究紀要 27: 1-40。
- 岡村吉右衛門 1962a. 日高アイヌの編物 その一。民芸手帳 48:34-39。東京民芸協会。
- 岡村吉右衛門 1962b. 日高アイヌの編物 その二。民芸手帳 49:32-37。東京民芸協会。
- 荻原真子 1998. アイヌ文化研究におけるアイヌプロジェクトの意義。SPbアイヌプロジェクト調査団編 1998. ロシア科学アカデミー人類学民族学博物館所蔵アイヌ資料目録。pp. 97-103。草風館。
- 荻原真子・古原敏弘・ヴァレンチーナ V. ゴルバチョーヴァ編 2007. ロシア民族学博物館所蔵アイヌ資料目録。草風館。
- 加藤 克 2008. 北海道大学植物園所蔵アイヌ民族資料について：歴史的背景を中心に。北大植物園研究紀要 8: 35-91。
- 萱野 茂 1978. アイヌの民具。すずさわ書店。
- 萱野 茂 1996. 萱野茂のアイヌ語辞典。三省堂。
- 河野広道 1956. アイヌの生活。楡書房。
- 小杉 康 1997. 物質文化からの民族文化誌的再構成の試み—クリールアイヌを例として—。国立民族学博物館研究報告 21: 391-502。
- 小谷凱宣・荻原真子 2004. 海外アイヌコレクション総目録 文部科学省科学研究費補助金(2001～2003年度)基盤研究(B)(2)研究成果報告書第2冊。南山大学人類学研究所。
- 古原敏弘編 1999. バラートシバログコレクション調査報告書。北海道立アイヌ民族文化研究センター。
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2004. アイヌ生活文化再現マニュアル 編む—サラニャー—。
- 財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構編 2018. キムンカムイとアイヌ—春夏秋冬—。
- 財団法人アイヌ民族博物館 1991. 児玉資料目録II。
- 財団法人アイヌ民族博物館 1999. アイヌ民族博物館伝承記録4 川上まつ子の伝承—植物編1—。
- 佐々木利和 1997. 東京国立博物館のアイヌ民族資料(上)北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 3: 1-22。
- 佐々木利和 1998. 東京国立博物館のアイヌ民族資料(下)北海道立アイヌ民族文化研究センター研究紀要 4: 1-14。
- 市立函館博物館 1979a. アイヌの狩猟用具そのほか 国指定重要民族文化財「アイヌの生活用具コレクション」整理報告書5。
- 市立函館博物館 1979b. 市立函館博物館蔵品目録—1民族資料篇。
- 杉山壽榮男 1940. アイヌの編物。人類学雑誌 55(2): 63-79。
- 杉山壽榮男 1942. 日本原始繊維工芸史 土俗篇。
- 田村すず子 1996. アイヌ語沙流方言辞典。草風館。
- 知里真志保 1976. 知里真志保著作集別巻1。
- 津田命子 1996. サラニブの種類と道具を使わない製作方法について。アイヌ文化 20。

帝室博物館編 1930, アイヌ風俗品陳列目録.
東京国立博物館 1992, 東京国立博物館図版目録・アイヌ民族資料篇.
鳥居龍蔵 1903, 千島アイヌ, (1976, 鳥居龍蔵全集 第7巻, に再録).
中川 裕 1995, アイヌ語千歳方言辞典, 草風館.
名久井文明 2004, 民俗的古式技法の存在とその意味 特に編組技法について, 国立歴史民俗博物館研究報告 17:185-240.
林 善茂 1959, アイヌの収穫・貯蔵技術, 北方文化研究報告 14:1-41.
林 善茂 1969, アイヌの農耕文化.
北海道アイヌ協会平取支部 1952, 北国の神秘を語る アイヌ写真帖.
北海道開拓記念館 1981, 民族 I 北海道開拓記念館収蔵資料分類目録 1.
北海道開拓記念館 1998, 小倉・北海道観光物産興社・W・カーティスコレクション他資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第32集.

北海道開拓記念館 2003, 旧拓殖館所蔵民族資料コレクション資料目録 北海道開拓記念館一括資料目録第37集.
北海道教育委員会 1980, 昭和54年度アイヌ民俗文化財緊急調査報告書(有形民俗文化財4).
幕別町教育委員会 1992, 吉田菊太郎資料目録 I.
三浦泰之 2001, ウィーン万国博覧会と開拓使・北海道 北海道開拓記念館研究紀要 29: 177-206.
吉本 忍編 2013, 世界の織機と織物, 国立民族学博物館.

欧文

Torii, R 1919, Etudes Archeologiques et Ethnologiques. Les aïnou des Iles Kouriles, Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo 42(1): 1-337

図版出典

図1、図3～10、図13～17: 所蔵機関の許可を得て筆者撮影
図2、図11、図12: 筆者作成

Woven Basket (*Saranip*) of the Ainu

Differences by Region and Period among Traditions Transmitted as “Souvenirs” and “Traditional Crafts”

OSAKA Taku

This study aims to analyze and propose categorization of Ainu woven basket (*saranip*) with attention to production technique, and to ascertain differences in region and period among categorized groups. Analysis has produced the following findings:

1) No Ainu woven baskets are found in Sakhalin, and further, there are relatively large differences in technique between items found in the Kuril Islands and Hokkaido.

2) Type Ia4 and Ib5 ceases after the 1950s. The background cause is hypothesised to be the migration of population from the Kuril Islands to Hokkaido and further south following Japan's

wartime defeat.

3) The proportion of Type II a3 has increased and its distribution has expanded since the 1950~80s.

4) Type II b3 appeared around the 1980s, and is still produced today.

5) Since the 2010s, production materials have continued to shift towards endodermis fiber of the cut-leaf elm (*Ulmus laciniata*). However, some producers consider the traditional material to be endodermis fiber of the Japanese lime (*Tilia japonica*), and both styles currently coexist.